

# サイパンにおけるチャモロ人の影響力

(原案 国際交流学科 2 年 太田なつみ、李芽藍)

サイパンと日本の交流を考えると、北マリアナ諸島の先住民族チャモロ人、カロリニア人の存在を思い浮かべることはほとんどない。これは単に日本人が彼らに関心を持たないからだ。彼らの人口は、サイパン島の全人口 7 万 2000 人の約 4 分の 1 を占め、しかも彼らの言語であるチャモロ語、カロリニアン語は、英語と共にサイパンの公用語であり、彼らの多くは島の政治、経済の指導的立場にある。彼らの中には日本人の血が流れる人びとも目立ち、日本との交流促進に前向きだ。この報告書では、サイパンにおけるチャモロ人に焦点をあて、彼らの歴史、文化、政治的、経済的影響力を概観し、日本がサイパンとの交流を促進していく上で欠かせない基本知識を提供したい。

## チャモロ人とサイパン島

現在、北マリアナ諸島での原住民族と言えればチャモロ人、カロリニア人を指すが、1521 年フェルディナンド・マゼランがグアム島と共にマリアナ諸島を発見した頃にサイパンに住んでいたのは、チャモロ人だけとされている。彼らの先祖は、紀元前 1800 年頃、インドネシア、フィリピンからカヌーに乗ってマリアナ諸島に移り住んだとされる。

サイパンは、マゼランによって「発見」された後 約 300 年間スペインによって統治されたが、彼らが島に持ち込んだ病気が広まったり、キリスト教の布教活動に協力しないという理由で虐殺が起ったりして、チャモロ人は民族滅亡の危機に瀕することになる。特に 1672 年に始まったスペイン＝チャモロ戦争は、キリスト教を強制するスペイン側と、自らの伝統的文化習慣を守ろうとするチャモロ人との間に 20 年以上にわたり起こった大規模な武力衝突で、スペイン人は、チャモロ人男性の大量虐殺を行った。その結果かつて 9 万人いたとされるマリアナ諸島の人口は、5,000 人以下に減ってしまい、生き残ったチャモロの女性と子どもは、グアム島に強制移住させられた。その後 彼女たちは、スペイン人、フィリピン人たちと結婚したが、自分の子どもが奴隷のように扱われるのを恐れて子どもを作らなかったため、さらにチャモロ人口は減り続け、1783 年には 1,500 人しか生存していなかったという。(注 1)

1815 年には、ようやくチャモロ人がサイパン島に帰島することが認められた。しかしサイパン島を離れて 120 年が経過しているため、すべての人が自分の先祖の土地

に戻ることは難しく「祖先の地に帰る」という意識は希薄だったらしい。加えてサイパン島の人口を回復させようとしたスペイン統治者は、19世紀初頭からカロリニア諸島からカロリニア人を移住させて、チャモロ人との混血を促した。そのためますます純血チャモロ人の存在は希少になった。

1870年代植民地獲得ブームの中、ドイツ、イギリス、アメリカがこの地域で勢力をつけ、1898年の米西戦争におけるスペインの敗北で、スペインのサイパン支配は終了し、同島はドイツに売却される。第1次世界大戦でドイツが敗北すると、1920年からは日本の委任統治領となる。1930年代には日本人の大規模移住がはじまり、わずか5年程で日本人人口が島民のそれを圧倒的に上回るようになる。日本は、サイパンでも他の植民地と同様に、学校を作ったりしたが、日本語教育・神社参拝などの皇民化政策を行い、チャモロ人たちは自文化を保つのに困難を極めた。なお、チャモロ人の地位を3等国民とし、サイパンに連れてきた4等国民（中国人、朝鮮人）より比較的注意深く扱ったという。（ちなみに2等国民は沖縄人だった。）そのせいか、日本統治時代には日本人とチャモロ人、カロリニア人（当時日本人はカナカ族と呼んだ）との混血は珍しいことではなかったようだ。

第二次世界大戦後アメリカによる統治が始まると、今度はアメリカ化の波が押し寄せ、現在に至っている。

## 伝統文化保持の問題

チャモロ人はサイパン島へ移住してから他国による統治が始まるまでの長い間、漁業や農耕による自給自足の生活していた。元来チャモロ社会は母系社会で、現在でも家族を大切にする文化が強く残っている。しかし外勢力の影響は非常に強く、土器を作る文化、伝統式農業、歌やダンスなどの知識は消失の危機にある。

今回の研修でお世話になった環境保護活動家、アンジェロ・ビラゴメス氏は、チャモロ人とスペイン人、日本人の血を持つ20代後半の青年で、サイパン島に暮らすチャモロ人についていろいろと私たちに語ってくれた。

ここでは彼のブログに掲載されている“Practicing my culture”というエッセイを紹介する。アンジェロは、サイパンの自然保護を考える際、そもそも島の資源を食い尽くしていったのは自分たちの祖先だったのか考える。ここ20年ほど、島の自然保護についてあれこれ説くのは、外からやってきた「白人」たちで、魚を取りすぎてはいけない、動物を狩ってはいけない、と先住民たちの伝統文化をとがめるようになっていった。かつて先住民が伝統的な *habits*（習慣）に乗っ取って狩猟をしていた限りでは、天然資源を枯渇させるような心配はなかった。しかし彼らはいったん「白人」たちから *technologies*（科学技術）を覚えると、「家族を養い、同時に自分の文化を実践するため」

に（より効率的に）魚を捕らえ、狩りをするようになり、資源の枯渇の危機を引き起こすはめになる。

チャモロ人は、アンジェロの親の代までは、現在すでに絶滅してしまった *mariana mallard*（マリアナマガモ）を普通に捕らえて食べていた。ではマリアナマガモを絶滅させたのは、チャモロ人なのだろうか。この鳥を食べなければチャモロ人ではないのだろうか。彼は次のように問いかける。

“Am I less Chamorro because I will never see a mariana mallard? Am I less Chamorro because I will never taste one? And is Saipan less Saipan because we no longer have bats and barely any coconut crabs?”（注2）

アンジェロは、チャモロ人としてのプライドと伝統を維持しつつも、新しい時代に適応したチャモロ人としての生き方を考えていくことを推奨している。マリアナマガモを狩らなくても、かつてのように漁をしなくても、21世紀型のチャモロ人として、サイパンでプライドを持って、自然環境保護に敏感に生きていく道を、アンジェロは模索している。そうしたアンジェロのスタイルを、少し前に流行った言葉「エコかっこいい」にかけて「エコかっこいい」と表現したのは、アンジェロの友人、パシフィック・イーグル社の松本綾子さんだ。

### チャモロ人とサイパンの政治経済

北マリアナ諸島は、外交と防衛以外の内政にはアメリカ合衆国の干渉を受けない自治領となっている。チャモロ人は、自分の島は自分で統治しようとする意思を強く持っている。「政治は島一番のスポーツ（number one sport in CNMI）だ」と言うほど、彼らの政治への関心は高い。サイパンの政治における重要ポストは主にチャモロ人が握っている。カリフォルニア人の政治進出も同じく活発だ。アメリカの干渉と、東アジアからの移民が多く増えたことに不安を感じた彼らのなかには、サイパンをチャモロ人の手に取りかえず運動をおこそうとした人もいたらしい。2008年11月 地元紙 *Saipan Tribune* には、チャモロ人がサイパンの外国人（韓国人、中国人、フィリピン人）に差別意識を抱いていることに対して、チャモロ人自身が自省を促す投書が掲載されたほどだ。（注3）

サイパンの政治に広範に関わって、同時に巨額の富を所有する三大チャモロ・ファミリーが存在するという。一方チャモロ人の中には政府からフード・スタンプ（食料配給券）をもらい、その日の食糧を得るために魚釣りに出掛ける人たちもいる。チャモロ人全体は決して豊かではない。なぜ政治力をもつチャモロ人は同胞を経済的に支援し

ないのか。その理由の一つに、自分の家族を何よりも大切にするチャモロの伝統がある。政治的権力や財力の分け前は、その政治家の家族・親族の間にしか届かない。血のつながらないチャモロ人に利益を還元するよりも、自分の親族を豊かにすることこそが重要なのだ。サイパンでの政治は、血統主義に基づいて機能することになる。こうした「伝統」に基づく政治体質は、賄賂や腐敗を生むことにつながる。これが現在サイパンの政治が抱える深刻な問題だそうで、ここにサイパンの政治の脆弱性がある。

サイパン社会経済における貧困問題も、「伝統」というキーワードから考えられる。現在、大半のチャモロ人は低賃金労働者であるが、そもそも彼らは20世紀に入ってからもしかばらくは、漁業などで生活を営み、しかも物々交換をしていた。現在50代から上の世代なら、その子ども時代にはまだ貨幣経済に余り馴染みがなかったはずだ。さらに戦後のアメリカの統治下では、アメリカは低所得のチャモロ人に住宅を無料で提供したりフード・スタンプを支給するなど彼らを「援助漬け」にしたので、「賃金を稼ぐ」という概念をうまく学習できなかったという背景もある。また、仕事より家族を優先する「伝統文化」も、貧困の原因となっている。例えば、チャモロ人の葬式は2週間以上続く。1週間以上先祖を祭る行事もあるし、これを葬儀に続けて行なう場合もあるという。しかもチャモロ人は大家族制度を守っているので、必然的に「弔う」メンバーも多い。場合によっては、1年間で祖父、祖母、叔父、叔母、従兄弟などの葬式、命日などが次々に起こり、延々と仕事を休み続けることもありうる。

チャモロ文化を維持しつつ、自らの手でサイパンを発展させていくことは、本当に難しい。

## まとめ

サイパンと大きな関わりを持つ日本は、「サイパン島＝リゾート地」というイメージを持ちながら、その島の先住民族であるチャモロ人の文化と歴史のことも全く知らない。サイパンの沖合2.5キロに位置するマニャガハ島は、マリンスポーツのメッカとして、日本人観光客から人気が高い。彼らが落とすドルによって、島の経済が潤うように見える。しかし、魚がよく獲れるマニャガハ島を日本資本が独占的に開発経営した結果、チャモロ人やカリフォルニア人は、島へ近づくことも、周辺で漁をすることも禁止され、生活が苦しくなった。

日本がサイパンに関わってきた歴史を理解することはもちろんのこと、チャモロ人を含むサイパンの先住民族から見るサイパンの過去と現状について深く知ることも、望ましい交流のかたちを模索する上で絶対に必要なのだ。

注1： 中島洋（太平洋学会専務理事）「17-18世紀にかけてチャモロ人が絶滅の危機に瀕した スペイン・チャモロ戦争」『やしの実大学』  
<http://www.yashinomi.to/micronesia/no8.html>

注2： Angelo Villagomez, “Practicing my culture” (The Saipan Blog – Saipan’s Most Popular Blog Ever Since)  
<http://jetapplicant.blogspot.com/2008/02/this-might-work.html>

注3： Dwaine Blas Reyes, “The shackles of racism,” Saipan Tribune (Nov.11, 2008)  
<http://www.saipantribune.com/newsstory.aspx?cat=15&newsID=85186>



1. 日本統治時代、チャモロ人（カナカ人）児童が通った学校。（北マリアナ博物館所蔵）



2. 今でも、島民は魚釣りに出かけ、夕方ビーチで新鮮な獲物を即売する。



3. 環境保護活動家のアンジェロ・ピラゴメス氏（左）はチャモロ人の、隣のシンタ・カイパット氏（元北マリアナ諸島下院議員、現労働局副局長）はカロリニア人の血をそれぞれ誇りつつ、活躍している。



4. チャモロ人とスペイン人、日本人の血をひくウェイン・パンジェリナン氏は、日本にサイパン観光をアピールすべく尽力している。（2008年世界旅行博 [於東京ビッグサイト]）



6. 2008年世界旅行博にて、北マリアナ諸島政府観光局が売り出す「サイパン伝統文化」。